甲斐の金山から　平成21年6月30日　第49号

博物館だより

国指定史跡・甲斐金山遺跡／湯之奥・中山金山

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館報

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館

THE Yu-no-oku MUSEUM OF GOLD MINING HISTORY

参加者募集!! 第9回 こども金山探険隊 2009 8/1[SAT]〜8/2[SUN]

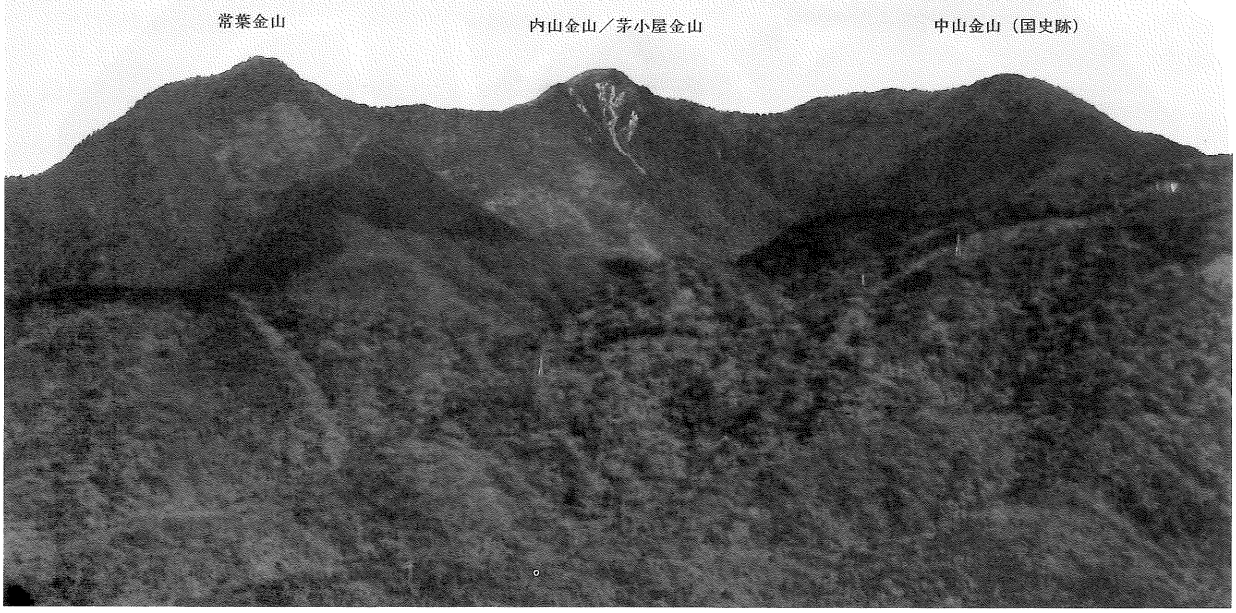
参加者募集!! 第9回 砂金掘り大会 2009 8/8[SAT]

参加者募集!! 第6回 東西中高交流砂金掘り大会 2009 8/8[SAT]

オンリーワンをめざします

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館 館長　谷　口　一　夫

日本の宝「甲斐金山」を包み込む蝙蝠山
この歴史的景観をメジャーに！これが私たちの夢です



基本的に人は価値ある物にひかれます。観光地一つ例にとっても、価値が集約されている所へは人が殺到します。京都など無限の文化遺産が有る所へは、季節を問わず通年で世界から国内から観光客を呼び込んでいます。そこには人々の共感を呼ぶ価値があるからです。

その価値基準（物差し）には個人差がありますが、古都・京都などには、深い文化・歴史遺産や京料理、おもてなし、また駅前の風情からして違います。観光地としての貫禄そのものです。その雰囲気に誰もが納得でき、「来てよかった」に変わります。

海外旅行でも空港へ着き、いよいよ空港から観光バスやタクシーに乗り込み、市中へ向かい始めると、色々な期待感で胸が躍ったりします。到着時の迎えられ方一つとっても、「来たぞ～」の気分に浸れたりします。それだけでも「旅に出かけてきてよかったなぁ～」と思ったりする瞬間があります。

実はこれらは定番の観光地へ赴いた時の感情の一コマにすぎないわけですが、一方、観光国とか有名な観光地とは無縁な場面であっても、自分の日常と違う異空間に入り込むと、不思議に新鮮さを感じたりします。

そこで、無心に生きる人の姿を目の当たりに見たり、接するとまた違う感情で、その国の人々

の力強さに触れ、魅力を感じたりすることがあります。決して観光地でもないのに、訪問者にとってはある意味での知的好奇心とか冒険心からか、興味をそそられたりします。

国のあり方や人々の暮らし方は千差万別であっても、自分とは違う世界で生きている人達には、その意味では変わった魅力があるものです。接することで、その人達の文化の深層に深く興味を抱いたりするわけですが、このような時、現地の博物館等を訪問しますと、妙に納得できるものを発見したりします。そして自然風土に根ざした生活のあり方に思わず感嘆したりします。

そうこう考えていると「価値」ってなんだろうか？。ふと考えてしまいます。

今日的な風潮からしますと、世界遺産登録を目指す動きが活発です。世界にその価値を認めてもらい登録されることで、その価値は世界の水準に達するからです。しかしこの価値は、未来永劫、地球規模で残していくことに同意し、それを守っていくという人類の責任、約束でもあるわけです。

多くは、その国々のレベルにおける遺産が集積された場が多いようです。いま山梨県と静岡県では、文化遺産としての富士山の価値を世界に認めてもらうために、数々の遺産の集約をしています。

日常的に富士山の見える距離で生活している者にとっても、富士山は素晴らしいと感じていますし、富士山・富士五湖には、海外や国内からの観光客も多数訪れています。世界遺産登録を実現させ、その環境を守っていくことで、更に富士山の価値は高まるでしょう。

その他、山梨県には富士山はもとより、個々に見ていきますと、たくさんの日本一があります。また歴史上においても日本の最初があります。立地も日本の首都・東京に隣接した素晴らしい位置にあります。にも関わらず本県の地価が十数年間連続して下落しています。これは本県の総体としての価値が認められていないという現実が目の当たりにあるようにも思います。

私は、本県の中で局地的な地域の発展はあり得ない、広域的な空間が活性化すれば、局地的な空間も活性化する、という考えを持っています。富士山山麓、八ヶ岳山麓、富士川流域、甲府盆地という大自然の括りの中にある「あらゆる素材」を認識し集約し組立てた「価値」を、ドカ～ンと発信すべく「産学官」・「民間」が一体となったアクションを一刻も早く行うべきだと考えています。これは私からの提案です。また、10年後には中部横断自動車道も開通しますが、山梨県南部地域（峡南）は、過疎化がさらに進むだろうという議論があります。戦う前から負ける議論をしても始まりません。今こそトータルで山梨県が峡南が光りを放つための作戦を開始すべきだと感じます。考えてみれば、これは峡南だけの問題ではなく、山梨県の問題でもあるわけです。私達はこうした中にあって、何をしたら良いか、日常的に博物館活動を通じ、考えを休んだことがありません。その目指す方向は、日本の宝「甲斐金山（黒川・中山）」を軸足に、日本の金銀鉱山を知る日本におけるオンリーワンの金山博物館を目指していくということです。

活　動　報　告

昨年、国立科学博物館で開催された「GOLD展」が全国４箇所（東京、静岡、新潟、山梨）で開催されてきました。今回、山梨県（山梨県立博物館）が最後の会場となり「金GOLD　黄金の国ジパングと甲斐金山遺跡展」と題して４月25日～６月15日の間で開催されました。この「GOLD展」には当館も展示品をはじめ、県立博物館事業の遺跡見学会（中山金山）などにも県立博物館のハブの一館として参画しました。また、「GOLD展」の運動企画展として、４月23日㈭～６月16日㈰の約２箇月間、第９回企画展「黄金伝説～実像と虚像～」を開催いたしました。

金山に残されていた遺構や金山道具、門西家に残された古文書、さらには判物証文写しに残された金山における金山衆集団の消長について改めて歴史の全容を伝えながら、何が実像か、何が虚像かを追いかけた企画展でした。

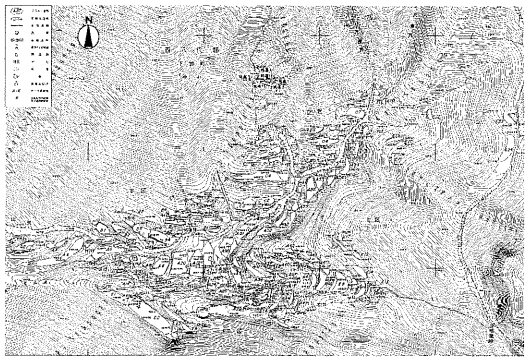
第９回企画展「黄金伝説～実像と虚像～」解説

国指定史跡・甲斐金山遺跡　中山金山・黒川金山

中山・内山・茅小屋の３金山は、“湯之奥金山”という総称で、また「信玄の隠し金山」という括りで語られ親しまれてきました。

しかし湯之奥金山遺跡の歴史的な全容を解明する声が高まり、また伝承等で曖昧模糊とした歴史でなく、本物の歴史を世に出し、生涯学習や観光資源として広く活用し、地域活性化に役立たせたいということから、平成元年から３箇年にわたる湯之奥金山遺跡総合学術調査を実施し、中世戦国期（戦国時代）に山中で営まれていた初源期「山金山（やまきんざん）」（鉱山からの産金）遺跡に残された遺跡の全容、鉱山技術のあり方、作業の様子、生活の様子などについて調査、大きな学術的な成果を得ました。この貴重な結果により、平成９年９月２日に甲斐金山遺跡（黒川金山・中山金山）として、国指定史跡に指定されるに至りました。

湯之奥・中山金山遺跡は、砂金に代わる初源期山金山の構造を持っていますが、黒川金山も同様な姿を呈していることから、甲斐金山の一つのパターンであるように見えます。沢を挟んで両岸に多くのテラス（平坦地）を持ち、作業域（鉱石採鉱・精錬場など）を取り囲むような生活域などからは、鉱山村の姿がコンパクトに集約されていた世界が見えます。この形を戦国期～江戸初期における甲斐金山のスタンダードとして提示します。

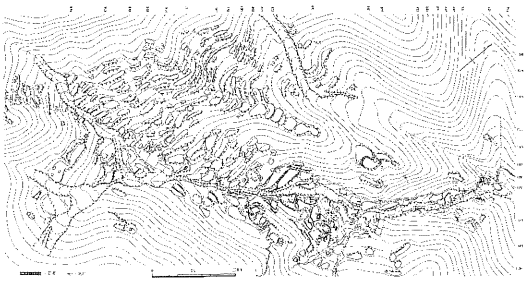


中山金山テラス図

一方、中山金山と共に甲斐金山遺跡として同時に国指定史跡に指定された黒川金山遺跡は甲州市（旧塩山市）上萩原の鶏冠山（1,710m）の東側山腹、標高1,200m～1,400m付近に広がります。

操業開始時期は16世紀初頭と見られ、ほどなく全盛期を迎えるものの、16世紀末には終焉に近づきます。「黒川千軒」と呼ばれる大規模な鉱山町という「虚像」も語り継がれましたが、その栄華も100年は続かず鉱山（土木）技術者としての新たな挑戦へ向け、鉱山で身に着けた技術で、生き様を変えて行きます。

黒川金山の指定範囲は、70.55ヘクタールという広大なもので、この区域内に約200のテラスと坑道24箇所が確認され、また、鉱山臼、陶磁器、鉄砲玉、銅銭、簪、石仏台座、一字一石経など、当時の生活を彷彿させる遺物が出土しており、特に「黒川型」と呼ばれる特殊な軸跡をもつ挽き臼の出土は、湯之奥３金山に特徴的な湯之奥型挽き臼と対局にあります。鉱山臼の変遷を探る上で、両金山における挽き臼のあり方は、金山の実像解明にも貴重な存在です。



黒川金山テラス図

遺跡の全体図は、いわゆる遺構（不動産）で、この遺構には遺物（動産）が包括されており、当然、これらの「存在＝歴史事実」となり、まさに金山の実像を伝える「現場」そのものと言えます。

幸い、湯之奥３金山には、金山に関わる「判物証文写」（内閣文庫所蔵）や湯之奥門西家文書等が残されており、考古資料と文献史料とのコラボレーションで、金山の実像を鮮明なものにしています。

人々が追い求めた夢と埋蔵金伝説

これまで実際に発見されている“埋蔵金”は戦後だけでも50件以上報告されていますが、出土銭を“埋蔵金”と言うのならば、そのケースは数え切れないほどになります。ちなみにほとんどが偶然の産物で、トレジャーハンターが発見したものではありません。

昭和46年、山梨県勝沼のブドウ畑で、蛭藻金2枚と碁石金18個、中国から輸入した銅銭が約5,000枚発見されましたが、この貴重な金貨現物は「GOLD展」でも公開されました。

さて、湯之奥金山年表では、西暦1534年（天文3年）の今川寿桂尼文書が、中山金山における人の動きを知る最初の文字史料として明記していますが、考古資料である中山金山遺跡出土の陶磁器年代から検証すると、それ以前の西暦1400年代後半～1500年初頭にかけての陶磁器があることから、確実にそこまでさかのぼれることが明らかです。

西暦1600年代後半頃になると金がほとんど産出しなくなったため、金山で働いていた人々は1600年代末までには山を下り、湯之奥3金山といわれる中山金山の中山村、内山金山の内山村、茅小屋金山の茅小屋村は、西暦1650年代の中山村から、順次、村名が門西家文書から消えていき、1600年末にはすべての金山村が廃絶します。金山村が消え、湯之奥村が包括していきます。

金山の終焉は、西暦1686年（貞享3年）の門西家文書に残されている「退転文書」にみられる時期で、文中に「まだ掘りかけの間歩があり、それを掘らせてもらいたい」という表記があることから、多少続いたことも検証できます。それを勘案しても1600年代末には、終えているとみることが出来ます。

よって、1500年初頭～1600年末迄の200年間の金山ということになります。

その後は、幕末まで様々な人物が入れ替わり立ち替わり山に入り、金山の幻を追いかける「間掘りの時代」となります。“埋蔵金伝説”を追った姿とも言えます。

未来への黄金伝説

総合学術調査から20年が経過しますが、調査時、中山金山からは数多くの鉱山臼が確認されました。その中で、湯之奥型は8点、また、関連調査が行われた内山金山でも湯之奥型が2点発見されています。関連調査時には鉱山臼の発見がなかった茅小屋金山からも、その後、続々と挽き臼や磨り臼などの鉱山臼を発見していますが、特筆すべきは、発見された上臼がすべて湯之奥型挽き臼であったことです。湯之奥金山として総称される3金山の操業年代が磨り臼や湯之奥型挽き臼の発見により、同時代金山であることが強く裏付けできます。また、江戸期に入っても湯之奥型が使われ続けた可能性があります。

今年度、茅小屋金山遺跡調査が行われようとしています。また一つ、甲斐金山の歴史の“実像”が明らかになる時が近づいています。湯之奥茅小屋金山での作業形態、技術体系など、中山金山では確認出来なかった歴史事実もあるのではないかとの期待が高まっています。甲斐金山遺跡の実態がまたひとつ明らかになることでしょう。もちろん茅小屋金山同様、将来的には内山金山についても同様の調査を行う必要があります。

伝説とは、「うわさ、風説、神話・口碑」などの「かたりごと」を中核に持つところの古くから伝えられてきた口承文学【『広辞苑』より】とありますが、これまでの調査研究で明らかになった歴史と、そしてこれから明らかになっていく歴史を重ねて、甲斐金山の歴史を正確に未来へ伝えていくことが、これからの“黄金伝説”を作り上げていくための重要な作業となります。その伝承者は、まさに現在に生きる我々なのです。

「金・銀・銅サミット」にて谷口館長講演

さる5月16日、「金銀銅サミット」が甲州市で開催されました。京都国立博物館の村上隆氏の司会で討論が行われました。

パネリストとして招かれたのは、谷口館長をはじめ、萩原三雄氏、石瀬佳弘氏、仲野義文氏、末岡照啓氏と、いずれも日本を代表する金銀銅山の施設代表者・研究者で、谷口館長によって甲斐金山研究の最前線が語られたほか、日本の初期金山を萩原氏、佐渡金山を石瀬氏、石見銀山を仲野氏、別子銅山を末岡氏から語られ、日本の鉱山技術史研究の課題を共有、今後の連携も約束されました。

会場には200人近くの聴講者が集まり、鉱山研究の進展や現状について、興味深そうに耳を傾けていました。

湯之奥金山・中山金山遺跡見学会　6月6日(土)

山梨県立博物館主催事業として行われた中山金山遺跡見学会。当館にとっても、今年度初となった一般対象の見学会で、県内外から約15名が参加しました。梅雨の時期で天候も心配されましたが、登山には最適な気候となり、マイナスイオンを浴びながらの気持ちの良い登山となりました。

館内の展示物で金山の知識を深めてから現地へ出発。楽な道のりではないものの、約1時間半かけて現地に到着し、史跡内の“女郎屋敷”や“精錬場”、“七人塚”など、石塔や坑道を自分の目で確認しながら現場説明を受けると、かつての金山の繁栄と歴史の重みを感じたようで、参加者の皆さんからは、大変勉強になり、とても楽しかったというご意見をお寄せいただきました。（写真は、現地で解説する小松学芸員）

山梨県立博物館「GOLD展」見学ツアー　6月13日(土)

「金」をテーマとした全国規模の展示会を、県立博物館の担当学芸員に解説していただき、「金」「鉱山史」「金山」に対する見識を深めるとともに、湯之奥金山の日本の鉱山史における位置づけと「山梨・身延」という地域での金の歴史的な役割などについて学ぶことを目的に、同時に、山梨の考古を紹介する代表関連施設である釈迦堂遺跡・山梨県立考古博物館の3館見学ツアーを湯之奥金山博物館友の会主催の事業として開催いたしました。

参加者は、町内を中心に総勢30人以上の見学ツアーとなり、観覧先からも大勢での来館を歓迎され、喜んでいただくほどでした。

県立博物館では中山学芸課長と海老沼学芸員に案内していただきましたが、皆、黄金のドレスや、黄金の茶室、そして巨大なナゲットや立派な金鉱石など、華やかな数々の展示物と、甲斐金山に欠かせない甲州金の数々に目を奪われた様子でした。

次の釈迦堂遺跡博物館では、釈迦堂から出土した土器や土偶、石器などが展示され、5,599点が国重要文化財で、うち7点は今秋イギリス大英博物館で開催される企画展での展示が決まっ

ており、そうした解説を秋山圭子学芸員にご案内いただきました。

この日、最後の見学となった山梨県立考古博物館では国指定史跡・金生遺跡のジオラマや縄文人の生活を再現し、時代ごとの山梨、それぞれの時代の日本全体がわかる展示で、保坂学芸課長に案内していただき、時間いっぱい、熱心に見学し、参加してくださった皆様にとっても充実した有意義な見学会となったようでした。

こうした県内の関連施設、または遺跡などをバスで巡る見学会ツアーなど、たくさんの皆様に金山史だけでなく、地域の歴史を学んでいただくような機会を今後も作って参ります。

館からお知らせ①

今年の夏もイベントもりだくさん。夏休み中は次の事業を開催いたします

- **実験教室～実験カーがやってくる**　期日：平成21年7月26日(日)　※参加受付終了
- **第9回　こども金山探険隊**　期日：平成21年8月1日(土)～2日(日)　※参加受付終了
- **夏休み親子映画観賞会**　期日：平成21年8月19日(水)　午後1時～午後4時30分まで
  場所：博物館映像シアター
  上映作品：「崖の上のポニョ」他　観賞無料

第９回　湯之奥金山博物館杯・砂金掘り大会

来る８月８日(土)開催！ 参加者募集中！

全国から猛者たちが集う毎年恒例・砂金掘りの祭典。エントリーは全部門混合で先着100名まで。現在、参加者募集中です。ジュニア、男女初心者、男女ベテランと３部門に分かれています。なお、自然河川で掘っている経験者は自分の腕を試すべくベテラン部門へのご登録がお勧め。午後からは東西中高交流砂金掘り大会を開催。砂金掘りの腕を競う中・高生徒たちの熱い戦い、今年の優勝校はいったいどこが!?皆様の応援よろしくお願いします！

○第９回砂金掘り大会　　**期日：平成21年８月８日(土)　午前９時～12時30分まで**
※予備日９日(日)・小雨決行

○第６回東西中高交流砂金掘り大会　　**期日：平成21年８月８日(土)　午後２時～４時30分まで**
参加校：灘(兵庫)、開成学園(東京)、駿台甲府(山梨)、山梨学院大学付属(山梨)、報徳学園(兵庫)

日　程

8:30～　湯之奥金山博物館集合・受付開始
9:00～　開会式・ルール説明
（デモ試合を含む）
9:20～　競技開始【ジュニア部門】
10:00～　【男女初心者部門】
11:00～　【男女ベテラン部門】
12:00～　結果発表・表彰式
12:30　一般大会終了・解散。
14:30～16:30
東西中高交流砂金掘り大会
17:00～　すべてのプログラム終了・解散

参加締切：開催日前日（７日）の午前中まで
定　　員：100名まで
参 加 費：大人　500円
小・中学生　300円
（受付時に頂戴いたします。）
競技部門：ジュニアの部（小～中学生）
男女初心者の部
（高校生以上の男女）
男女ベテランの部（年齢制限なし・過去入賞経験のある方は自動的にベテラン部門にエントリーされます。）
お申し込み・お問い合わせは
当館（0556-36-0015）までお願いいたします。

８月中無休開館のお知らせ

夏休み期間の**８月の１か月間は無休開館**いたしております。
多くの皆様のご来館をお待ちしております。
◎開館時間：午前９時～午後６時まで（受付は閉館30分前まで）

平成21年度公開講座のお知らせ

平成21年度公開講座のテーマおよび日程が次のように決定いたしました。10月から翌年２月までの全５回。各回とも午後２時～４時まで。（質疑応答を含む）今年も多くの皆様のご聴講をお待ちしております。（講師の都合により、演題が変更されることもございます。）

通算回	期　日	演　題	講　師　名
第61回	10月 3日(土)	日本の金銀鉱山にみる甲斐の人脈	信州大学教授・人文学部副学部長・歴史学博士 笹　本　正　治
第62回	11月21日(土)	甲斐金山にみる鉱山技術	湯之奥金山博物館館長 谷　口　一　夫
第63回	12月19日(土)	甲州金研究～４つの金座の消長	早稲田大学エクステンションセンター講師 西　脇　　康
第64回	１月23日(土)	戦国大名・常陸佐竹氏と鉱山開発	日本地学研究会会員 大　森　直　之
第65回	２月20日(土)	日本とペルーの鉱山事情最前線	三井金属鉱業㈱金属環境事業本部 資源開発部 部長　五　味　　篤

館からお知らせ②

「第11回特別展　写真展・ふる里の四季」

期日：平成21年８月11日(日)～９月29日(火)　場所：湯之奥金山博物館多目的ホール
主催：フォトクラブペガサス

地元の写真愛好会「ペガサス」主催事業です。多くの皆様に身延の四季の美しさを知っていただきたいというメンバーの思いの詰まった写真展。 多くの皆様にご鑑賞いただきたく存じます。(観覧無料)

協賛：身延町、甲斐黄金村・湯之奥金山博物館
後援：身延町教育委員会、身延町商工会、下部観光協会、下部旅館振興協同組合

フォトクラブペガサスよりひと言

身延町は、山梨県の南部に位置し、町の南に日蓮宗総本山身延山久遠寺が、東には下部温泉郷、甲斐黄金村・湯之奥金山博物館や現行千円札の逆さ富士の撮影地として名をはせている富士五湖のひとつである本栖湖があり、また、北には西嶋和紙をテーマとした施設であるなかとみ和紙の里などが立地している信仰と観光の町です。

私たちのクラブは、旧下部地区の写真愛好の有志により結成されています。日ごろから町内を活動舞台に作品作成に努めております。

そんな日ごろ撮影した町内の「風景」「祭り」「花」などの作品を展示し、また、日本の原風景を含めたふるさと身延を作品として、写真を通じて多くの方々に見ていただき、この事業を行うことが、少なからず町の振興の一助になることを願って止みません。

博物館日誌 (平成21年４月～６月)

４月
1日(水) 年度初め
4日(土) 身延山五重塔落慶・身延町観光振興まつり(～5日)
17日(金) FM／FUJI出演
21日(火) 玉穂中県内巡り
23日(木) 第9回企画展「黄金伝説～虚像と実像」初日(～6月16日)
24日(金) 開館記念日
浅川中2年県内巡り
25日(土) 山梨県立博物館「金GOLD　黄金の国ジパングと甲斐金山展」初日(～6月15日)
29日(水) 昭和の日

５月
3日(日) 憲法記念日
富士川ふるさと工芸館出張砂金採り(～5日)
4日(月) みどりの日
5日(火) こどもの日
13日(水) 押原中県内巡り
NHK甲府取材
15日(金) 櫛形中県内巡り
白根御勅使中県内巡り
16日(土) しもべおんせん祭り(～17日)
18日(月) 若草中県内巡り
21日(木) 浅川中県内巡り
22日(金) 久那土小町内巡り
24日(水) NHK甲府OA
浅川中県内巡り
26日(火) 島田中県内巡り
GOLD展資料返却
29日(金) 松里小3・4年県内巡り

６月
6日(土) 甲斐金山ツアー・湯之奥中山金山遺跡見学会
11日(木) 土肥金山職員視察研修のため来館
13日(土) 県立博物館見学ツアー
21日(日) 内山金山踏査
26日(金) フジテレビ「とくダネ」撮影・取材。中山金山遺跡登山
27日(土) フジテレビ「とくダネ」撮影・取材。灰吹き実験

編集後記

冬には夏が待ち遠しかったのに、夏になれば冬が待ち遠しくなるようなこの暑さ。でも、そう思えるのは“四季”のあるこの国に住んでいるからこそ。春夏秋冬それぞれの季節に、それぞれの楽しみがあるのだからそれはそれで何とも贅沢なことです。

そして季節はいよいよ夏本番。そして待ちに待った夏休みがもう目前です。海、夏祭り、花火、キャンプ、肝試し…。夏の楽しみは盛りだくさんですが、そんなアクティブな夏の風物詩を、今年の夏も出来るだけたくさん体験したいものですね。

でも、扇風機の前でごろ寝、というのも夏にしかできない捨てがたい風物詩…かな。

博物館だより　第49号　平成21年６月30日
〒409-2947　山梨県南巨摩郡身延町上之平1787番地先　甲斐黄金村・湯之奥金山博物館　電話 0556-36-0015　FAX 0556-36-0003
博物館HPアドレス http://www.town.minobu.lg.jp/local_minobu/kinzan/index.html　博物館Eメールアドレス yunoking@town.minobu.lg.jp